

「空に向かって」

打田中学校 2年 岩本 悠汰

『失敗』という言葉を使わない。一つ一つの試みに新しいデータ、経験があり、そうしたものが今後の新しい挑戦にむけてのかてになるものと考えている。」

これは3月13日和歌山県で行われた小型ロケット「カイロス」初号機の打ち上げ失敗についての説明の一部である。

民間小型ロケットの打ち上げがあるということで、この日私はいつも以上に空が気になる1日だったことを覚えている。

私が中学生になって入った部活は科学部だ。実験をしたり、スライムを作ったりとあまり「動」きのない部活なのだが、夏休みに取り組むペットボトルロケット制作、これは間違いなく「動」きのある活動をしていると思う。まず材料として必要なのが炭酸飲料のペットボトル(1.5L)を3本。これが私にとって一番の難題なのだ。なぜなら私は炭酸飲料が苦手でほとんど飲まないからだ。それを3本必要だと言うのだ。少し考えて、炭酸を抜いてから飲めば大丈夫かと思い試してみると、ものすごく甘いジュースになったが、なんとか飲む事が出来ると分かった。それからはあきない様に、少しずつ少しずつ飲んでいき、ようやく3本のペットボトルを用意することができたので、それらを材料にして制作することになった。

ペットボトルロケットは、飛距離が一番重要になる。羽根や重り、ガムテープの貼り方もとても丁寧に、同じく作っている部の仲間と共に仕上げた。頭の中のイメージでは私の作ったロケットが、夏の空を切りさく勢いで飛んでいるのだが、実際はその直前、飛ぶ瞬間まで分からないのだ。

3月13日のカイロス発射もそうだった。最初は3月9日発射だったが延期になり、13日に。その当日も無事に大きな音とけむりが上がり、成功した様に見えた。しかし5秒間、空を飛んだ後に爆破した。この5秒間は短い時間だったのかも知れない。しかし、それは間違いなく和歌山でロケットが飛んだ5秒間である。私はその時間をとてもうれしく思ったけれど、本音はあと少し遠い空まで飛んで欲しかったというのも事実である。

ペットボトルロケットもカイロスも、その瞬間まで何が起こるか分からないものなんだろうと思う。当日の天気もそうであるが、貼っていたテープが外れてしまっているのに気がつかない事があるかもしれない。そうやって色々な事を考えて、対策をしっかりしていてもダメな時はダメなのだ。「飛んだ」という事だけではダメで、更に上が目標になってくるものだ。

実際に私のペットボトルロケットも、夏休み中の学校のグラウンドで、数人の先生と同じ部活の仲間達に見守られながら発射した。

「飛んだ。」

「僕の作ったロケットが飛んだ。」

しかしそこで「飛んだ」事よりも更に上の飛距離や、飛ぶ際の放物線の描き方が次の目標として目の前にあらわれてきた。これで終わったわけではなく、また今日からが始まりなんだと思わずにはいられない一日だった。

それからの部活動はまた「動」くことがないものだったが、新しい学年になり新入部員もたくさん増えて、私の2回目のペットボトルロケット制作が始まる。今回は前回のロケットより更に高く遠くへ飛ぶロケットを作るために、重りを調整したり、ガムテープの貼り方を工夫したり、羽根の大きさを変えたりと自分が納得するまで試していきたい。そして、夏の良い天気の日で最高の状態でロケットを打ち上げたいと思う。

「カイロス」、私のロケットは少しだけ長く空を飛ぶけど、いつかお前も追い抜いてくれよ。

